

「わたしたちに自由を与えるため」

祈禱書の朝の礼拝で唱えられる、「賛美の歌」にこのような箇所があります。

「キリストよ、あなたは栄光の王、永遠にいます神の御子。わたしたちに自由を与えるため、人となられたとき、おとめの胎もいとわれなかった」

クリスマスとは、わたしたちを自由にするために神が起こした出来事です。

わたしたちはあらゆる不自由さの中で生きています。たとえば、国籍、年齢、性別、あらゆる違いがわたしたちにはあります。それらはこの世がいかにか豊かであるかを証するものです。しかし、人は互いの違いを認めあえず、豊かさをもたらさずはずの違いを、不自由なものへと変えてしまいます。それは、自分を安全圏に置きたいからです。違いを利用して、自分の立場を守ろうとする。こちらは優秀であちらはだめだ。奴らは危険だから排除しよう。そうして、両手に武器をもつのです。なんと不自由なのでしょう。

主イエスの誕生は、そんなわたしたちを「自由にする」出来事です。主イエスは、人々の作り出したルールからはみ出しているとされた人々のところに神の愛を届けて回りました。そればかりか、互いを裁かないと生きられない、不自由さががんじがらめになった人間の、その縄目もろとも十字架にかかってくださいました。そうやって、主イエスはわたしたちを解放するためにこの世に来てくださいました。わたしたちはイエス様が十字架にかかって、解放してくださったから、自由に生きることができます。しかしそのためには、降臨節のはじめに申し上げたように、冒険に出なければなりません。マリアやヨセフのように「信じる」冒険です。頑なに守っている殻を破り、違いが認められない心、疑いを離れて、「信じる」一步を踏み出す冒険です。マリアは聖霊によって身ごもりました。疑いを超えて御告げを信じたからです。彼女の神を「信じる」という決断の先に、主イエスは誕生しました。信じる、それは神のみならず、他者を信じることです。それがヨセフの信仰です。未婚の妊婦、マリアを信じ、愛したのです。その決断の先に主イエスはお生まれになりました。

神を、そして相手を知るところに主イエスはお生まれになります。疑いを超えた先に、主イエスによってもたらされる自由な世界が広がっています。相手を、神を知ることができるなら、わたしたちは武器を捨て、両手を開くことができます。それこそ、主イエスの十字架上の姿です。両手を開いて、神にすべてを明け渡している。すべての人にご自分のすべてを開かれている。あの姿こそが、わたしたちに自由を示す姿です。

疑いではなく、信じることの先に、主イエスはお生まれになる。そこに広がる地平こそが、主イエスによってもたらされる自由な世界。すべての命が互いに疑いを超えて、交わっている神の国です。今日お生まれになった御子が、両手を開いて、そこにわたしたちを迎えてくださいます。